

# 琉球大学学術リポジトリ

## 琉球と日本本土の遷移地域としてのトカラ列島の歴史的 位置づけをめぐる総合的研究

メタデータ	言語: 出版者: 高良倉吉 公開日: 2009-03-03 キーワード (Ja): トカラ列島, 琉球, 十島村, 中之島, 奄美 キーワード (En): Tokara Islands, Ryukyu, Toshima village, Nakanosima island, Amami Islands 作成者: 高良, 倉吉, 山里, 純一, 池田 栄史, 赤嶺, 政信, 狩俣, 繁久, 真栄平, 房明, 豊見山, 和行, 鈴木, 寛之, Takara, Kurayoshi, Yamazato, Junichi, Ikeda, Yoshifumi, Akamine, Masanobu, Karimata, Shigehisa, Maehira, Fusaaki, Tomiyama, Kazuyuki, Suzuki, Hiroyuki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/9008">http://hdl.handle.net/20.500.12000/9008</a>

# 蘇民将来符と九字（四縦五横）符号

山 里 純 一

## 一 蘇民将来信仰と呪符

### ①蘇民将来信仰

『備後国風土記』逸文（『釈日本紀』所引）には、次のような蘇民将来説話が掲載されている。

昔、北海にいた武塔の神が妻を求めて南海へ行く途中、二人の兄弟に一夜の宿を乞う。富裕な弟は断わったが、兄の蘇民将来は貧しいながら歓待する。その神は帰途再びこの地に立ち寄り、蘇民将来の娘を除いて皆悉く滅ぼしてしまう。そしてその娘に「私は速須佐雄の神だ。これから後の世に疫気があれば、蘇民将来の子孫と称して茅の輪を腰に着けよ。そうすれば疫病から免れることができる」と告げる。

これは、全国各地の神社で六月三十日の夏越の祓の際に行われる「茅の輪くぐり」（社殿の前に立てられた茅または藁で編んだ大きな輪をくぐる神事。この輪をくぐれば災厄や疫病を免れるといわれている）の由来譚として知られている。

また北は青森県から南は長崎県壱岐島に至る各地で、蘇民将来符を門口に吊したり、貼ったりして疫病除けとしたり、田畑の中に立てて害虫除けとしたりする習俗が今なおみられるが、これらも基本的には前掲の説話にもとづくものである。

こうした蘇民将来符は、鎌倉時代末期の『拾芥抄』や江戸時代の随筆等にもみえるが、各地の遺跡からも出土する。これまで確認されているだけでも、新潟・茨城・静岡・京都・大阪・兵庫・三重・和歌山・群馬・神奈川・埼玉の各府県の三十余の遺跡から、五十数点の蘇民将来の呪符木簡が出土している。その片面に「蘇民将来之子孫宅也」「昔蘇民将来之子孫住宅也」「蘇民将来子徒也」「蘇民将来之子孫人家也」などと墨書されており、中にはその裏に☆の記号や、「招福門」または「噫急如律令」と書いたものや、「九九八十一」と「八九七十二」（さかさまに書く）を併記したものもある。大半は中世のものであるが、古代のものでは、京都市の壬生寺（みぶでら）境内遺跡から出土した、長さ九・二cm、幅一・五cm、厚さ〇・二cmの呪符木簡があり、伴出遺物などから九世紀初頭と推定されている。形状は上部を圭頭にして左右に切り込みを入れ、下部を斜めに切り出している。切り込み部分には紐状のもので巻いていた痕跡があるというので、あるいは村落の出入りに張り渡された綱などに吊り下げていたのかも知れない。「蘇民」の二文字以下は右下半部が欠損して不明であるが、木簡の長さ、墨痕跡から推測して「将来子孫也」の文字が墨書されていた可能性が高い。

従来、蘇民将来符の最古はこの呪符木簡とされてきた。ところが二〇〇一年に長岡京右京六条二坊六町の六条条間南小路北側溝から、表裏に「蘇民将来之子孫者」と書かれた小矩形の蘇民将来符が出土した。この出土事例により、蘇民将来符は長岡京期（七八四～七九四）にはすでに行われていたことが明かとなった。この小矩形の蘇民将来符には穿孔があることから、これに紐を通して首か腕にかけていたことが推定されている。



### ③沖繩における蘇民将来符

波上宮や普天間宮でも最近から「茅の輪くぐり」の神事を行っているが、沖繩には現在、蘇民将来符の習慣はみられない。しかしその知識が伝わらなかったわけではない。琉球宮社の歴代神主をつとめた又吉家には、元文五年（一七四〇、乾隆五）に、薩摩の諏訪神社の神主であった井上宮内祐之が、新参利姓の元祖屋嘉比親雲之智安に対して守札の法を授与したことを示す文書の断片が残っており、その中に次のような「蘇民ノ札」に関する記載がみえる。

蘇民ノ札 正月七日ニ出之

○吾是蘇民将来之子孫也

したがって、智安が薩摩において蘇民将来符の知識を学んで帰ったことは確かである。しかし沖繩に蘇民将来符が行われていないのは智安が沖繩に帰ってそれを実践しなかったのか、実践したものの沖繩社会になじまず定着しなかったのか、どちらかであろう。

寺社の蘇民将来符とは別に、「蘇民将来之子孫也」は一般のまじないにも取り入れられており、石垣市の新本家文書と与那国町の西銘家文書には、「風気悪敷時行之砌、此符文書首ニは候得者、只今相去り候由」という説明文が付された次のような呪符が見える。

出土した中世の呪符木簡にも蘇民将来之子孫也の文字の上に五芒星や梵字を書いた例はあるが、このような符籙を書いたものは珍しい。本土で刊行された「まじない書」の類が流布してそれから書き写したものであろうが、それにしても石垣市と与那国町という遠く離れた地域に、呪符もその説明文も全く同じものが伝わっているのは興味深い。書写した資料が同じものだったのかも知れない。

なお西銘家文書には、これとは別に「蘇民生来在我家」という呪句も書き留められている。

なお数年前に死去した宮古のトキ（易者）の遺品にはさまざまなお札類が含まれているが、お札には仕立てられていないが、呪符を書き留めた白紙があり、その中に「傳染病除け」として「蘇民将来之子孫」の呪句も見えることから、この易者が蘇民将来符を用いていた可能性もある。

## 二 九字（四縦五横）

九字とは「臨兵闘者皆陳列在前」の九つの文字のことで、陰陽道や修験道の呪法に用いられることは知られている。四縦五横はそれを符号化したものである。トカラ列島の悪石島上集落には四縦五横を刻んだ石が二基ある。場所は地図で示したところであるが、それぞれ集落に入る道路の北方と南方の二カ所に置かれている。碑面は集落内に向いているが、外からの邪悪な物の侵入を防ぐ魔除けの石である。この四縦五横を刻んだ石がいつ誰が置いたかは今となっては知る人はいない。

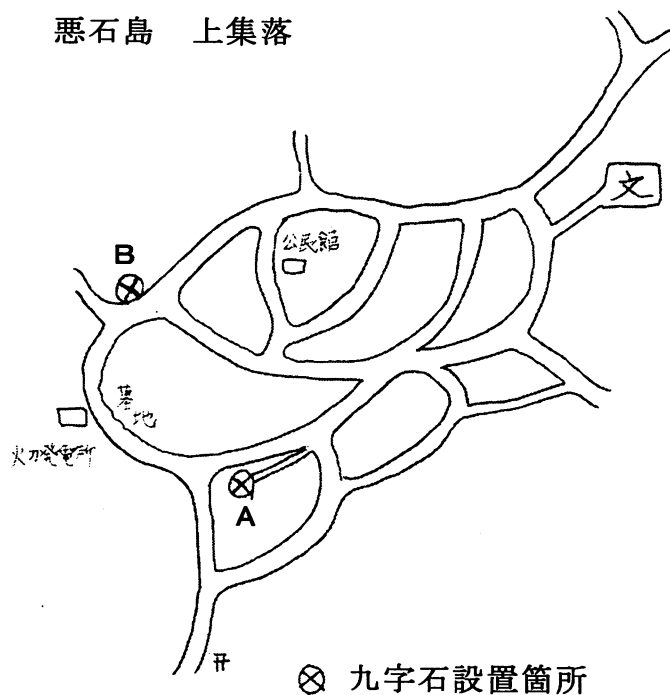
今は取り壊されてしまったが、悪石島の坂元新熊氏の家の門柱は上部が九字になっていたようである。また漁師が海に出て竜巻を見たら、「臨兵闘者皆陳列在前」と唱えながら刃物または指にて切るといふ民俗事例も報告されているが、そのことは下野敏見氏が紹介しておられる悪石島に伝わるまじないに関する資料にも出てくる。その「万祭」の祭文

## 悪石島 上集落

の中に「急々如律令」の文言も見える。

奄美諸島に属する喜界島では、浦原、坂嶺、滝川、中間、島中、中里の各集落に、石敢當の文字の下に四縦五横の符号を彫ったものが見られる。また徳之島でも、今のところ伊仙町の面縄集落に限定されるが、そうした符号を伴った石敢當が散見される。ただしそこでは石敢當とは書かれず、「石散當」が一般的である。伊仙町歴史民俗資料館に所蔵されているものには「石眼當」とある。

下野敏見氏は、奄美諸島におけるこうした九字の存在を南九州修験道の影響と考えているようである。



(やまざと じゅんいち 琉球大学法文学部教授)